
絶望と希望の狭間で

—原発核事故後をキリスト者として生きる—

片岡輝美¹

福島原発核事故は人間の限界を露わにし、飛散した放射能汚染はこれからも生命を脅かしていく。キリスト者はこの時代、どこに立って生きていくのかを考えたい。

¹かたおかてるみ：会津放射能情報センター代表

鎮まらない怒り

東日本大震災により東京電力福島第一原子力発電所核事故が発生してから4年6ヶ月が経った。あの日生まれた怒りが、今でも小さくならない。それどころか、ひとつの怒りが鎮まらないうちに、新たな怒りが加わり、もともっと大きくなっていく。そして、何かの瞬間に膨れあがり、破裂してしまいそうな思いに時折駆られる。人は、ひとつのことに真剣に取り組めるのは3年が限度と、最近聞いた。ならば、もう限界に来ているのかもしれない。しかし、怒り続けることを放棄できない。

第1の怒りは私自身にある。平和活動に加わる中で、うっすらと原発の危険性に気づいていながらも、深く知ることを後回しにしていた自分がいる。なぜもっと早く知ろうとしなかったのか。

第2の怒りは、国、福島県、地方行政が原発核事故直後から始めた「安心安全キャンペーン」により「経済を中心とした復興」を目指す大きなうねりへの怒り。被害を過小評価し、自分たちにとって不都合な真実を隠蔽し、人々の不安を払拭するためというもっともらしい言い方で、人々の間に滑り込み、県民を思考停止させる謀略。その不誠実さが私たちをどれほど傷つけ、落胆させ心身ともに疲労困憊させているのか。

第3の怒りは、原発核事故現場や福島県が直面する危機的な課題。廃炉作業に日々携わる7千人もの作業員の生命が守られていない現実と難航を極める廃炉作業。人間が踏み入れてはならない領域に入った結末が、まだ始まったばかりとしか思えない。

そして、第4の怒りは、信仰者として、原発核事故の世界をどのように生きていけばよいのか分からない怒り、苦悩である。どこに希望があるのだろうか。本当に希望はあるのだろうかと問う日々を走り続けてきた。

原発核事故を経験したひとりとして、あの時から何を考え行動してきたのかを振り返り、今の福島の実状を見つめ、信仰者として何をなすべきなのかを考えたい。

第1の怒り、無関心であった自分

3・11 前と後では「知ること」の意味が変わった。原発核事故前には、歴史の学びから人類の英知を見出した。生命を守る人々との新たな出会いやその生き方に励まされ「知ること」の喜びを感じた。

2005 年 2 月、「九条の会・西栄町学習会」を始めた。動機は何のことはない。前年 12 月「九条の会・会津若松」発足の記念講演会で、講師・小森陽一氏の話、私がほとんど理解できなかったからである。当時 9 才から 19 才の息子 4 人の子育て中であった私は、彼らが生きる日本の将来に危機感を持ちながらも、日本の何が問題なのかを、言葉に表すことができない自分にこそ、危機感を持った。2 ヶ月後、九条の会・会津若松事務局長であった渡邊規雄氏に月例学習会の講師を依頼し、同級生のキリスト者女性 2 名と「九条の会・西栄町学習会」を立ち上げた。日本キリスト教団若松栄町教会が建つ「西栄町」を拠点とし「自分の言葉で平和を語る」ためには学習こそが全ての始まり、と名づけた。次第に、仲間が人を呼び約 10 名が固定メンバーとなった。学びは「立憲主義とは？」から始まり、日本国憲法の成り立ちや意義、天皇の戦争責任、沖縄米軍基地の現実、ナチス台頭の経緯、世界情勢、日本の権力者たちの目論み、自民党憲法改正案など、多岐に亘った。講演会や憲法記念パレード「ピースウォーク 9」、会津若松市内の「戦跡マップ」作成と販売、映画「日本の青空」上映会などフットワーク軽く、アクションも起こし続けた。渡邊規雄氏曰く「1、2 回で終わると思った」学習会は今でも継続され 10 年目を迎えた。私たちは、日本国憲法が第 2 次世界大戦の苦しみから生まれ、不断の努力によってこれまでの平和が作り出されてきたことを学び、自民党の憲法改悪を阻止すべく、強かに元気に運動を展開していた。そのエネルギーは「学習こそ、平和の最大の武器」との阿波根昌鴻さんの言葉に通底するものであった⁴⁾。

2010 年 8 月 6 日、広島原爆投下を覚える日、東京電力福島第 1 原子力発電所 3 号機にプルサーマル導入が宣言され、原発に新たな恐怖が加わっ

た。私たちが学習会や署名活動に参加し始めたその時、2011年3月11日がやってきた。

私たちの結婚記念日であったその日の午前中、四男の中学校卒業式を終え、午後2時過ぎ、兵庫県で待つ次男と三男に会うために、私は磐越西線の電車に飛び乗った。僅かな春の陽ざしを車窓から感じながら、子どもたちの義務教育が終わり、さあ、これから九条の会を中心とした平和活動に本腰を入れて行こうと思った瞬間、聞いたこともない携帯の警報音が鳴り響き、大きな揺れを感じた。電車は緊急停止。我が家に残してきた息子や夫、彼が牧会する若松栄町教会教会員、当時、閉園間近であった託児所・栄町教会ベビーホームの子どもたちを、余震で揺れる車内で案じながら、車中に4時間近く閉じ込められた。ネットニュースを見ていた乗客のひとりから声が上がった。「震源地は宮城県沖と福島県沖だ！」思わず私の口から「ああ、福島原発がやられた…」と、言葉が洩れた。

あの時から「知ることの喜び」が劇的に少なくなった。この国が原発を、なぜ、どのように導入してきたのか、事実を知れば知るほど、知らなかった自分が情けなかった。私は、原発の危険性にうっすらと気づきつつも、なぜ、もっと深く知ろうとしなかったのか。長年、反原発運動に身も心も捧げ訴え続けていた人々の声に気がつかなかったのか。自分の無知無関心、無責任が悔やまれた。確かに、先に知っていたからと言って、私ひとりの力で何ができただろうか。しかし、我が身にその災難が降りかかってから、情報収集に必死になった自分の危機意識は不十分であった。何しろ、「浜通りも原発銀座」と10代の頃聞いた覚えがあったが、10基の原子炉が建っていたことすら知らなかった。

2013年9月15日から日本全国の原発が停止していたが、東日本大震災から4年5ヶ月にあたる2015年8月11日、九州電力川内原子力発電所1号機が再稼働された。毎月11日は東日本大震災犠牲者遺族にとって、かけがえのない生命の月命日。その日の再稼働は、震災被災者や原発核事故被災者の痛みを逆なでした。電力会社の配慮は皆無だ。それよりも、ここでは原発核事故は起きるはずがないと信じているのだろう。そして、我が身に放射能は降りかかるとは想像しないのであろう。その無関心、無責任

が、次の原発事故震災の引き金になるかもしれないのに…。

第2の怒り、「安心安全キャンペーン」

原発事故直後から、日本政府は「ただちに健康に影響はない」と繰り返した。この言葉を信じた人々も信じたかった人々も多い。「安心安全キャンペーン」が旋風のように、県内を駆け回った。先頭に立ったのは日本甲状腺学会会長・山下俊一長崎大学教授である。彼は、若い頃にチェルノブイリ原発事故汚染地に入り、医療に従事することで原発事故の影響を良く知る人物であった。その彼が、自分に任せるようにと大混乱の福島県庁と福島県立医科大に入り収め、県内を講演して回った。5月5日喜多方市でも講演が行われると聞き、九条の会の仲間と出かけた。

第一声は「今やフクシマは世界に名が知られた。ヒロシマやナガサキの比ではない」。チェルノブイリ原発事故と比較して福島への放射能被害の影響は全く問題でないことを力説、そして、最後に「今は国家の緊急時、国民は国家に従わなくてはならないのです」と、締めくくった。質疑応答が始まり、教員が翌年度から学習指導要領に加わる原子力エネルギー政策をどのように教えるべきかと質問があった。彼は「福島の子どもはラッキーだ。これほど線量が高くなったところは、どこにもない。しかし、ガイガーカウンターを持って、福島の子どもたちは自分たちの回りの線量を測ることができる。万が一、身体に異常があっても、それを乗り越えることにより、偉大な医者や科学者が生まれてくるかもしれない。だから、福島の子どもはラッキーだ」と答えた。私は耐えきれず「ウソをつくな！私たちはモルモットじゃない！」と叫んだ。放射能被害の実態を知りながら精神論を振りかざす科学者が真実を語らない先には何が起きるのかと、背筋が寒くなるのを覚えた。あれから4年近く経た2015年が明けて間もなく、山下教授は前述の喜多方市講演直前の2011年5月1日、県民健康調査スキーム打ち合わせにて「福島県は世界最大の実験場」だと発言していたことが明らかになった。

2014年3月7日発行『FRIDAY』に、福島医大関係者のみに安定ヨウ素剤が配布された事実が報道された。原発核事故直後、福島県庁は、県外の医療機関などから114万錠の安定ヨウ素剤を緊急収集し、自治体に配ったが、服用については指示を出すことを躊躇。結局、独自に配布を決定した三春町と双葉町以外は県民に配ることはなかった。不配布の理由は、3月14日国が所管する放射線医学総合研究所から「指示が出るまで勝手にヨウ素剤を服用してはいけない」とする文書が発表され、同18日には、県放射線健康リスク管理アドバイザーである山下俊一教授が「福島原発から30kmほど西に離れば、被ばく量は年間限量量の1mSV（ミリシーベルト）以下で、ヨウ素剤は不要」と県立医大医師らに強調したからだ。しかし、県内の市井の医師が情報公開請求したことにより、医大内部資料が明らかになった。それによると医大は県から4千錠のヨウ素剤を入手。1号機が水素爆発した3月12日から配り始め、医師だけでなく医療行為を行わない職員家族や学生にも配布された。原発核事故発生後、動揺し病院に来なくなった医師もいた。その院内の混乱を鎮めるために配布を決定したようだ。しかも服用を県に進言していない手前、配布について箝口令が敷かれたとの医大関係者の証言も記載されている。私も3月12日朝、路上で出会った県会議員に安定ヨウ素剤の配布を依頼し、また、その足でホームドクターを尋ね、安定ヨウ素剤の備蓄はあるか、県から配布通達があったかと問うた。しかし、県会議員は安定ヨウ素剤が何であるのか分からず、またホームドクターも危機感のない表情で備蓄も配布もないと言った。

一体、国や福島県は、子どもたちや私たちの生命を何だと思っているのか。国や県はその民を守らずして、存在する意味などないのではないか。このように、山下氏を始めとする科学者や福島県、県立医大が、人の生命を最優先しているとは思えない事実はあまりにも多い。なぜ、そうなのかとの問いに、ある若者の鋭い指摘が答えている。2011年5月27日『朝日新聞』の「声」欄に定時制高校教員が投稿した。以下、抜粋である。

「ある授業で少し原発のことに触れた。『3号機が不調のようだね』と言うと、4年の男子生徒が怒ったようにこう言った。『いっそのこと原発なんて全部爆発しちゃえばいいんだ！』。内心ぎよっとしつつ、理由を聞いて

た。彼いわく『だってさあ、先生、福島市ってこんなに放射能が高いのに避難区域にならないっていうの、おかしいべした（でしょう）。これって、福島とか郡山を避難区域にしたら、新幹線を止めなくちゃなんねえ、高速を止めなくちゃなんねえって、要するに経済が回らなくなるから避難させねえってことだべ。つまり、俺たちは経済活動の犠牲になって見殺しにされてるってことだべした。俺はこんな中途半端な状態は我慢できねえ。だったらもう1回ドカンとなっちまった方がすっきりする』とのことだった。（後略）。

会津放射能情報センターの始まり

日本政府から送られた科学者や医者たちが次々と県内に入り安心安全を広めたことにより、住民は、自分の住む地域は安全だと考える立場とそう考えられない立場に大きく分かれた。住民や家族の繋がりが切り裂かれ始めた。分断である。それによって生じた悲しみ、苦しみ、困惑は、どれとして同じものはなく、どれも深く大きい。

私たち「九条の会・西栄町学習会」は事故直後から緊急学習会や映画上映会を立て続けに実施。毎回同じ顔ぶれが集まってきた。『安心安全キャンペーン』が信じられない市民であった。同学習会が母体となり 2011 年 5 月 11 日に「放射能から子どものいのちを守る会・会津」を、同年 7 月 11 日には「会津放射能情報センター」を設立。活動拠点は同年 3 月末栄町教会ベビーホームが閉園となっただけの若松栄町教会教育館。共に生命を守ろうとの呼びかけに、会津若松市内の母親や市民が集まり、次第に、県内自主避難者が加わっていった。

県内自主避難者の叫び「無知で無関心な自分に戻りたくない」

A さんは郡山市内の持ち家であるマンションで被災。1 才児と 6 才の息

子ふたりと県内の実家へ身を寄せた。テレビでは「原発が危ない」と報道されていたが「本当に危ないのなら国が避難させてくれる」と思っていた。しかし、周囲から次第に人も車も減っていくことに不安を感じ、会津へ一時避難した。その後も「国が対策してくれる」と思って自宅に戻ったものの、国が何もしないことに疑問を抱き、近県の避難所へ。その避難所の閉鎖に伴い、再び会津への避難を決心した。会津は夫が職場まで通うことができ、家族が離散しないで済むギリギリの場所だったからだ。

県外自主避難者には避難先自治体により無償で借り上げ住宅や家電製品が提供された。そこで、県内自主避難者にも同様の支援をと、県に申し入れを度々行った。しかし、県からは、まずは避難区域からの強制避難者が優先だと説明をされ、県内自主避難者にもいづれ支援があるだろうと考え、子どもの新学期に合わせて、まずは全て自費で引っ越しをした。

しかし、自主避難者への待遇は一向に改善されなかった。強制避難者の借り上げ住宅への入居が終わった 2011 年 10 月、再び県に連絡すると「自主避難者が入れる借り上げ住宅はない」と対応された。避難生活では自宅のローンに合わせて避難先の家賃を支払い、夫の通勤費が嵩み、公立への区域外就学が認められない子どもが私立校へ転校することで学費も上乘せされた。重い経済的負担のために貯金を切り崩す生活が続いた。A さんは何度も県に電話を掛け改善を求めたが、たらい回しにされ、ついには、勝手に避難しておきながら「借り上げ住宅に入れろ」と騒いでいる変な人と扱われた。

そこで、A さんは情報センターで知り合った自主避難者と、災害救助法の適切な運用による自主避難者の借り上げ住宅入居を求める活動を始めた。チラシやブログで仲間を増やし、復興庁や厚生労働省に請願を出した。

2012 年 11 月、ようやく自主避難者が現在住んでいる物件が県の借り上げ住宅として認められることになった。しかし、それにはその時点で既に避難が完了していること、子どもや妊婦がいる世帯であること、4 人家族の場合、家賃が 6 万円を越えないことなどの条件が付けられた。つまり、6 万円より千円でもオーバーしていれば、家賃補助対象とならず支給はゼロとなる。結局、一緒に活動した家族 40 数家族のうち、この支援を受け

られたのは半数にも満たない。自主避難者同士も分断され対象外者は今も自己負担の生活が強いられる。

Aさんは、会津若松では自主避難者であることを話さないようにしていた。子どもには、楽しかった保養プログラムを夏の思い出として作文に書いたり絵に描いたりさせなかった。政府が安全だと言っている地域から勝手に避難し、お金をもらって被害者面しながら、子どもに贅沢をさせると言われないように、子どもがいじめられないようにするためだ。もし、そうなれば、親子共々行き場を失ってしまう。分断は家族の中でも起こった。親からは、国が大丈夫だと言っているのに、子どもを転校させるのはAさんの身勝手だと批判された。

2014年3月末、Aさん一家は、会津若松市から県外に移住した。夫は公務員を辞め転職し、マンションも売った。家族と一緒に住めるようになったが、気持ちが寄り添っているわけではなかった。夫はAさんの「放射脳」を止めさせるために、自分は全てを捨てたのだから、Aさんにも放射能のことは忘れろと言う。会津で生活していた頃は、会津よりも汚染の少ない地域に行けば良かったと後悔していた。しかし、夫を残して避難すれば、家族がバラバラになる。それは別な後悔になる。しかし、もし避難しなかったら、もっと後悔していたはず。だから、夫との移住を決心したのだが、既に同じ気持ちではなかったことが、移住後に明らかになった。

多くの原発核事故被災者同様、Aさんも雨や雪が降る中、給水車に子どもを連れて並んだ。しかし、今では、子どもに無用な被ばくをさせたことは、我が子に見えない爆弾が落とされたのと同じだと感じ、原発の危険性に無知で無関心であった自分を悔やんでいる。だからこそ、無知で無関心な自分に戻り同じ過ちを繰り返したくないと考えているが、一旦県外移住すると、その気持ちを持ち続けるのは決して簡単ではないと言う。

原発核事故被災者となったが故に、確かに生き方が変わった。しかし、それは恐れと嘆き、嗚咽、怒り、悔しさの中から選んだ、いや、選ばざるを得なかった選択だった。Aさんは福島での子育てを心から楽しんでいて、豊かな自然の恵みにあふれた街で、愛する夫や両親、子どもと日々を重ね、ママ友と子育ての喜びも苦労も分かち合うという当たり前の、しかし何に

も代え難い幸せを、原発核事故が木っ端微塵に打ち砕いた。そして、子どもの生命を守りたいという親としてごく当たり前の願い故に、県内に両親を残しマンションを手放し、大好きな故郷や地域の繋がりを諦めた。これは、2014年関西電力大飯原発3、4号機差し止め訴訟において、住民の主張を認めた樋口英明裁判長の判決にある「国富の喪失」そのものである。

「このコストの問題に関連して国富の流出や喪失の議論があるが、たとえ本件原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても、これを国富の流出や喪失というべきではなく、豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことができなくなることが国富の喪失であると当裁判所は考えている。」(2014年5月21日「大飯原発3、4号機運転差止請求事件判決要旨9被告のその他の主張について」より)

第3の怒り、人類が踏み入れてはならなかった 領域を犯したこと

福島原発の廃炉作業はどれも困難を極めている。汚染水対策も苦闘が続いている。福島原発は高さ30メートルの海岸を20メートル削り、海拔10メートルの上に建てられたため、事故前から地下水流入は大きな問題だった。1号機から4号機建屋周辺では計57本の井戸「サブドレン」から水を汲み上げて地下水位を調整し、建屋が傾くのを防いでいた。

現在、毎日800~1000トンの地下水が原発サイトに流入し、そのうち300トンが建屋内に流れ込み原子炉に接触し汚染水となっている。地震や津波によって壊れたサブドレン27本を修復し、新設されたものと合わせて計41本が設置された。そのうち山側20本で、今年9月3日に地下水を汲み上げる作業が始まり、2日間で約330トンを取水し集水タンクに保管した。浄化設備で処理後、どうしても除去できない放射性物質トリチウムの濃度が排出基準(トリチウムは1リットル当たり1500ベクレル未満)を満たしていることを確認した上で海洋放出されるが、9月14日に行われた1

回目の放出量は昨年試験的に汲み上げ保管されていた約 850 トンで、放射性物質トリチウム濃度は 430～460 ベクレルだった。今後、1 日 300 トンの流入量を半減できると、国や東電は試算している。

さらに、汚染水対策としては、地下水バイパスや凍土遮水壁、トレンチ（坑道）の汚染水除去、港湾流出を防ぐ護岸地盤改良、海側遮水壁などが進められている。しかし、今年 8 月 20 日現在、敷地内には約 52 万トンの汚染水がタンク 953 基に保管され、年内は約 100 基が増設される。汚染水との闘いは終わりが見えないのではなく、まだ、本格的に始まってもないのかもしれない。

1～3 号機プール内の使用済み核燃料棒や溶融燃料（燃料デブリ）の取り出しも大きな課題である。溶融燃料の所在を明らかにするために、4 月 10 日、1 号機格納容器にロボットが投入されたが、5 時間後、途中で動かなくなった。東電は原因不明としているが、11.1SV/h の高線量、強い放射線の影響が原因ではないかと言われている。

8 月 2 日、3 号機から使用済み核燃料棒の上に横たわる 20 トンの大型瓦礫の撤去作業があった。建屋には 220mSV/y の高線量のため人は近づけず、クレーンによるつり上げ作業は数百メートル離れた免震重要棟から遠隔操作で行った。落下した場合には、瓦礫の下の核燃料棒の損傷や接触の弾みでゲートがずれプールの水の漏れも考えられ、結果、夥しい放射性物質が放出される危険性があるため、その日の作業は中止となり、作業員を構内に入れないと県内では繰り返し報道された。しかし、万が一のその危険性は構内だけではなく、東日本に及ぶとも言われ、本来は県民や国民にも最大の警戒と避難準備を促すことが必要であったはずだ。会津放射能情報センターは、市民放射線量測定団体 SAFecast との共同プログラムで、南相馬市小高区に設置されたモニタリングポスト数値の上昇に注意するように、全国のセンター会員に ML で呼びかけた。

1 号機と 2 号機の間にある排気筒が倒壊する危険性も言われている。この排気筒は、格納容器内の圧力が高まった時に、フィルターを通して強制的に気体をベントした。2014 年 12 月、1 号機と 2 号機に繋がるこの排気筒の根元が 25SV/h と発表され、原発敷地内では最も線量が高いことが分

かった。さらに、高さ 120 メートルの排気筒の 66 メートル付近でつなぎ目の破断が確認されている。当然、修理補強を行うべき状況であるが、高線量のために作業員が近づけない。現在、東電が取る唯一の対策は、遠くから監視カメラで異変がないかを目視することのみである。

4 つの原子炉は汚染水の中でブカブカ浮いている状態とも言える。今後、大きな余震によって、また台風や大雨によって、地盤沈下がさらに進み、原子炉や排気筒が倒壊する危険性も大きい。私は直接的間接的に、元作業員から「震度 5 強の地震があったら、後ろを見ないで逃げろ」「常に自分の車はガソリンを満タンにするようにと親方から言われている」と聞いた。高線量の中、作業する彼らの働きがなければ、この廃炉作業は進まない。なのに、再びの危機でも、東電は作業員 7 千名の安全確保・生命の責任を持たないつもりなのか。そして、住民や国民にも、適切な情報を提供しない東電や福島県の不誠実さに怒りを覚える。再びの危機に、彼らは私たちの生命への責任も持つつもりもない。そもそも、収束に向かう術も未開発な核の領域に、人類は踏み込んでではならなかった。原発核事故の被害や被災に費やされる金額は際限ない。青天井の廃炉費用を、一体誰に負担させる気なのか。

野田佳彦総理大臣による「冷温停止状態宣言」から 間もなく 4 年

2011 年 12 月 16 日野田佳彦総理大臣の「第 1 原発が冷温停止状態に達し、事故そのものは収束に至ったと判断されるとの確認を行った」との宣言により、県内は一気に復興の加速度が増した。しかし、今現在、原発サイトはその宣言とはほど遠い状況にあるのは明らかだ。原発核事故被災者を取り巻く状況もさらに厳しさを増している。廃炉まで 30 年から 50 年と言われているのに、帰還政策は強行に進められている。避難解除になれば、強制避難者は自主避難者となり、国を頼らない自立した生活が求められる。県内外、国内外の子どもや若者の交流は元気と復興のシンボルとなり全て

は美談として報道。この先に見えるのは、全世界に復興の証しとなる2020年東京オリンピック開催。その時点で避難者はゼロ、原発核事故はなかったこととされるのか。そして、再稼働も海外輸出も当然のこととして進んでいくのか。

会津放射能情報センターの動き

会津放射能情報センター（以下、情報センター）は、国や福島県、東電にとって不都合な真実を知らされないことに大きな怒りを感している市民が、生命を守るためにつながり活動する団体である。その働きを記したい。

情報センター活動の柱はふたつ。ひとつは「安全かどうかは私が決める」。日本政府や福島県の基準や発表に頼るのではなく、自らが食品や空間土壌などの放射線量測定を継続し安全を確認する姿勢を持つことを目指している。私たちは1台目の食品放射能測定器 GDM15（総額 240 万円）を 2011 年 10 年に導入し、これまで米、魚、野菜、水、土壌など約 2300 回の測定を重ねてきた。1 検体 1 kg を 20 分測るとおおよそのセシウム 134 と 137 の数値が得られるが、さらに詳しく正確に調べるためには最短 90 分必要となり、1 日に測定できる件数も限られる。そこで 2 台目の GDM15 購入を検討し始めた。これは、市民が危機感や不安感を持ち続けることに疲れを覚え無関心になった結果、県内各地に設けられた役所や市民測定所が休止や閉鎖になっている現状と全く異なる。私たちが測定を継続できるのは、全国からの協賛金によりセンター専従スタッフを置くことができること、測定代が無料になったこと、そして、センター会員同士が情報交換をし、支え合っているからだ。今年 3 月末、2 台目 GDM15 も 1 台目同様、ドイツに拠点を持つ EMS（連帯福音宣教会）からの支援により購入。食材はセンター会員が持ち込むだけでなく、専従スタッフがスーパーなどで県内外の食材を買い求め測定結果を積み上げ、センター会員の判断材料となっている。

運動着と制服を測定

食べ物だけでなく、子どもの衣類の汚染状況を知りたいとの声が母親たちからあがった。原発核事故以降、真実を知る怖さを繰り返し経験し、さらに子どもの環境を直視することに緊張を覚えた。小学生のリュックサック 6 袋と運動着 15 着が集められ、細かく裁断し測定が始まった。結果は現実を知ること…。重さ 1 kg 換算のリュックサックから、セシウム 134、137 合算で平均 24.6 ベクレル、最大 30.6 ベクレルを検出。事故前に使用されていたナップサックは不検出であった。運動着は平均 15.1 ベクレル、最大はこちらも 30.6 ベクレル検出。砂埃でズボンには上着より大きい数値が検出された。全て洗濯済みだが、放射能物質が繊維の中に入り込んでいると考えられる。ベクレルとは、1 kg または 1 平方メートルから、放射性物質が崩壊する時、1 秒毎に飛び出している放射線の数。運動着は 1 kg もないが、子どもが、毎秒確実に放射線を浴びている、いや、身に着けているということが分った。震災直後から 3 年間着用した小学生の制服からは、キロ当たり 61.9 ベクレルを検出。母親は不安を覚えながらも、経済的な負担で制服を新調しなかった自分を責め、非常に落胆した。自分の選択の誤りが、将来の子どもの健康を脅かしたら…と、不安を打ち明けた。これは、母親として生きている間、抱え続けぬぐい去ることができない不安である。

思い出も奪う原発核事故

2011 年 3 月まで 40 年以上運営された若松栄町教会ベビーホームの園児や息子たちが遊んだ滑り台を 2014 年 7 月に撤去した。足を着地する所に雨や雪が流れ落ち溜まり、乾燥し濃縮を繰り返し、2013 年 7 月の測定でキロ当たり 4503 ベクレルのホットスポットであることが判明したからだ。その時点でセシウム 134 が半減期を過ぎていたので、事故直後は 6000 ベ

クレル近くあったと思われる。私は、園児らの笑顔や歓声の思い出がある滑り台を何とか残したく汚染土の除去を試みたが、線量が落ちることはなかった。ある日、会員の親子が滑り台で遊び始めた時、数値を知っている母親が「離れて！そこは線量が高いよ！」と叫ぶのを聞き、ついに撤去を決心。工事を終えた夜、20代の息子たちは撤去を知らされ「放射能はそうやって、思い出も奪っていくんだ」と、心から悔しがっていた。今年5月、再びその場所の空間放射線量を測定した結果、0.4 μ SV/h以上を検出。一旦、土壌に沈着した汚染は、そこに留まり続けることが分かった。

人の思いに耳を傾け寄り添う

情報センター活動のもうひとつの柱は、原発核事故を繰り返したくない、あなたをひとりにしたくないから「人の思いに耳を傾け寄り添う」こと。毎月開催のしゃべり場や内科医による健康相談会、精神科医による心の相談会や会員からの要望により随時開催される学習会など。また、各地での脱原発デモや集会への参加。さらに、保養のために、夏の神戸や北海道への旅行を企画。日本キリスト教団新潟教会との共同プログラム「いいがたはうす」は、同教会員の空き家を借用し、週末や子どもの休みに合わせて家族が利用することができる。

ある高齢の強制避難者が山崎知行内科医の個別相談に訪れた。全村民が村外避難した葛尾村に自宅がある彼女の足取りは重く、動作は非常に緩慢だった。震災前、女性リーダーとして活躍しバレーボールを楽しみ、よさこいを踊っていたとは到底想像できない。声と体を震わせながら訴えた。「夫は絶対自宅に帰るというが、私はもう無理だと思う。復興の波に乗ろうとする夫と乗れない自分。長年仲良く連れ添ってきたふたりが、人生の終盤にさしかかった今、なぜ仲違いをしなくてはならないのか。自分の人生のデザインが描けない今、もう自分は自分ではなくなったと諦めの気持ちが湧いてくる。ひとり泣いていると、夫は『泣くな！』と怒鳴る。泣くことすら許されなくなった」。

お母さんもお父さんも子どもも我慢している

2013 年から「原子力行政を問い直す宗教者の会」との共催で北海道保養プログラムが行われている。2015 年夏、浄土真宗本願寺派東林寺（虻田郡倶知安町）・山階顕雄副住職ご一家の細やかなご配慮を頂き、雄大な北海道に抱かれ、身も心も解放された母たちがつぶやいた。

会津若松で子育てする母親は、「久々に深呼吸した気分。スーパーでも心配しないで食材を選べるのが嬉しい。そう言えば、原発事故前は『今日は何を食べようか』と食材を選んでいたんだっけ。でも、今は、食べられそうな食材から調理できる献立を考えていた。それすらも無意識になっていた自分が、どれほど我慢していたのかに気がついた」と、語った。

福島市から会津地方に移り住み、5才と2才の子どもと参加した母親は「震災直後の1年間、近所に避難していた。その時長女はちょうど今の次女の年齢。夫は、表情豊かにおしゃべりを始める長女のこの頃の成長を知らない。だから、今、次女をすごく可愛がっている」。「お父さんも我慢していたのね」と問う私に、「きっとそうだと思う、何も言わないけど」と、何か思い巡らすように答えた。

東林寺倶知安幼稚園の砂場で遊ぶ子どもは、サラサラの砂に歓声を挙げた幼い子もいれば、母親の顔色を覗き、足を踏み入れるのを躊躇っている子もいる。共に、砂遊びを母親から制限されているのである。「お母さん、砂場に入ってもイイ？遊んでもイイ？」と繰り返し確認しながら遊ぶ子どもを見た大学生の末息子が「あんな光景、悲しい。子どもは、本来そんなこと心配するはずがない、その必要がないはずなのに！」と、憤っていた。

知る力と見抜く力、そして、見分ける力

2013 年 3 月 24 日、会津大学で甲状腺検査説明会が開かれた。山下俊一

教授の一番弟子で、当時甲状腺検査の責任者であった鈴木眞一教授は「小児甲状腺ガンは100万人にひとり程度の発症であり、甲状腺は除去しても一生薬を飲み続ければ問題はない。福島原発事故の影響はない、手術を受けても騒ぐ必要はない、なぜなら、たった3人しか発症していないのだから」と、発言を繰り返した。質疑応答で私が指名された。「福島県や先生たちは私たちの不安を解消するために甲状腺検査を行うと言うが、私たちは、あなたたちに不安を解消してほしいのではない。私たちが知りたいのは事実なのです。私たちは、確かに恐ろしい事実を知ったらたじろぎます。でも、信頼できる仲間や医師と繋がることによって、次に何をなすべきなのか、自分たちで判断できる力も持っているのです。今ほど、鈴木先生は『たった3人』と発言しましたが、珍しい病気で三例も見つかるのは多数と考えるべきなのではないですか」と、質問した。賛同の拍手が起り、鈴木教授は「たった3人とは言っていない」と弁明し始めた。しかし、つい数分前の発言でもあり会場は「何回も言ったぞ!」「絶対言った!」と騒然となり、鈴木教授も「言ったとしたら、訂正します」と陳謝した。場内が静まった頃、私は「たった3人と言いましたが、我が子に起こったことならそうは言わないはずです。もっと謙虚になってほしい」と、続けた。

鈴木教授への怒りも大きかったが、自分の発言には確信があった。情報センターの山崎医師個別相談会を受ける前と後の母たちの表情は全く違う。子どもの健康をこれほど心配する自分はおかしいのだろうか和相談室に入る。しかし、山崎医師が母たちの不安を傾聴し子どもの症状を判断する。さらに、将来の健康に障害が出ないために、今、留意すべき事を告げる。母親は、我が子の将来に影響があるのかと新たな不安も恐れも感じる。しかし、今、為すべき事が明らかになった時、自分の不安を理解してくれる医師やともに悩む仲間がいることを実感した時に、その表情は変わってくる。自分はひとりではないと信じられるのだ。「わたしはこう祈ります。知る力と見抜く力との身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように（フィリピの信徒への手紙 9 節・10 節)」。事実を知る力と真実を見抜く力を、誰のために何のために身に着けるのか。それは、大切な存在の生命を守るため。会津放射能情報セン

ターは、この混沌とした時代の中で、本当に重要なことを見分ける使命を与えられ、この4年6ヶ月、担い続けている。

第4の怒り、希望と絶望の狭間で

福島原発核事故以降、私は希望と絶望の間を揺れ、自分の精神的なバランスを取ることに難しさを覚える。子どもの生命を守りたいだけなのだ。なぜ、東電と日本政府に責任を取らせないのだ。再稼働と海外輸出を許してはならないのだと、多くの人々が繋がり怒りの声を挙げているその場に希望を見出す。それは、原発核事故震災の痛みを経験すれば、想像すれば、当然生まれて来る叫びなのだ。その一方、原発サイトには、人類が踏み込んではいけなかった世界の結末が広がる。どれほど人々が繋がっても、原発作業員が健康と引き換えに廃炉作業に向かっている、厳しい危機はあそこに存在する。福島原発核事故は、私たち人間に限界があることを突き付けた。

原発サイトの現状を、日本政府や福島県、そして東電はどのように考えているのだろうか。彼らにとって、これは危機的状況ではないのか。この危機を認めない、認められないとするなら、それは人間の愚かさや傲慢ではないか。さらに、もし危機を認識していながら再稼働と海外輸出を進めるのであれば、子どもやこの国、この世界の未来を放射能汚染の泥沼に引きずり込んでいくつもりなのか。

この時代の絶望とは

私はキリスト者として原発核事故後の世界をどのように生きるのかと、自らに問い続けている。地球規模の汚染が続き生命を脅かされている現実を、徹底的に絶望することしかないと考えている。絶望とは、人間は放射能を制御できないという事実を受け入れること。一旦、放射能汚染が広が

れば、人間は避難するほかに生命を長らえる手段はないと知ること。つまり、放射能汚染の現実には、人間は為す術がない。この限界を受容することが絶望することであり、この絶望を悩みに悩むことからしか、先には進めない。「祈れば、救われる」は、私には気休めにしか聞こえない。祈ることだけでは、原発再稼働の阻止も子どもの生命を守ることもできないのだ。

原発核事故は政治的課題であるから、教会に持ち込まないとの立場を取るのであれば、私は問うてみたい、イエスはどのように生きたのか？と。イエスは波風立てない平穏無事な世界を作ろうとしたのか。平穏無事な状況は、権力者にとっての平穏無事でしかなく、痛みを負わされている者の痛みはそのままである。それどころか、自分たちは忘れられた存在なのかと、さらにその痛みは増す。イエスは社会の底辺で涙する人々に近づき共に生き、その存在のために立ち上がったのではないのか。イエスは政治に関与しなかったのか。イエスは時の権力者に抗ったのではないのか。縄で鞭を作り神殿の牛や羊、鳩を追い出し、賽銭箱をひっくり返したイエスは怒りに震えていたのではないのか。神殿が主の御心に叶っていなかったが故の怒りではなかったのか。もし、平穏無事な社会を作り出していたなら、あの凄惨な十字架上の死はなかつただろう。権力者に不都合な社会や正義を生み出そうとしたから、その逆鱗に触れ十字架に掛けられたのではないのか。ならば、キリストに倣う生き方と信仰を選んだ者が、生命を脅かす原発再稼働に立ち上がり反対の声を上げないのは、なぜなのか。

原発核事故震災により 11 万人が今でも家に戻れない。原発核事故がなければ、失われなかった 1962 名の生命が、震災関連死として報道される（2015 年 9 月 27 日『福島民報』）。将来の希望を失い自死する人が後を絶たない。数年掛けて構想を練り、やっと福島市内に家を建てたにもかかわらず、放射能汚染によって 3 ヶ月しか住めなかった若い母親が、「この間、我が家をもう一度見たくなくて出かけて来た。でも、近くには行けなくて、遠くから眺めて来たんだけど、本当に温かい空気が流れるステキな家だった…」と、嗚咽しながら話してくれた。また、原発核事故後、避難先で気づいた胎内の生命を、苦悩の末に諦めた母親もいる。

あなたは、礼拝堂から外に出て、既にこの苦しみや悲しみに出会って

るのだろうか。もし、まだ出会っていなければ、いつ出会うのか。今は、まだその時ではないと言うのだろうか。もしそうであるなら、それは、原発の存在を知りつつも、深く知ることを後回しにしていた 3・11 前の私の姿に他ならない。

あなたはどのように生きるのか

盲人バルティマイが、ある日突然イエスと出会った。障がいを持ち、物乞いする日々、底知れぬ絶望感を味わっていたことだろう。社会で最も弱い立場、しかし、誰も助けてくれない。彼の存在は無きに等しかった。その彼が、ある日突然イエスに出会った。この人なら自分に気がついてくれるかもしれない。彼はこれまでに出したこともないような大声で叫ぶ。あまりの騒がしさに人々は静止したほどだったが、彼は叫び続けた。イエスはその声を耳にし、招いた。彼は上着を脱ぎ捨て喜び勇んでイエスの足元に駆け寄る。上着を脱ぎ捨てるとは今までの自分を捨てるということか。この時に既に彼は、イエスによって新たな生き方が与えられると期待したのだろう。

イエスは問う、「何をしてほしいのか」。バルティマイは即座に答える、「目が見えるようになりたいのです」。私は、自分の願いを聞いてくれるかもしれない存在に出会ったら、何を願うだろう。あれも…これも…かもしれない。しかし、バルティマイは、困難な人生を送りながらも、既に決まっていた。「目が見えるようになりたい」。これは彼の祈りが、生き方がぶれていなかったことを表す。人々に無視され蔑まされようとも、希望が定まっていた。イエスの問い「何をしてほしいのか」は「あなたはどのように生きたいのか」と、具体的な生き方を求める問いかけだ。

「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」。主イエスはそのままのバルティマイを良しとした。しかし、これでこの記述は終わっていない。バルティマイは目が見えるようになった直ぐ後、イエスと共に歩む生き方を選ぶ。祈りが聞かれ「そのままのあなたで良い」とされたバルティマイ

は、そこからの一步を歩み出す。「そのままが良い」と「私はこのままで良いのか?」は相反する。しかし、キリストに出会い受け入れられたバルティマイは、新たな生き方を選び、立ち上がった。

2013年暮れ、長男夫婦が路上生活者への給食支援を行っている渋谷区宮下公園に向かった。既に陽は落ち寒風が吹いていた。給食を待つ人々の影があちらこちらに見える。時間になり整然と列が組まれた。給食を渡す人々の中に小さな姿がふたつあった。「温かい紅茶はいかがですか?」可愛らしい声が響く。放射能汚染から逃れるために、福島県から東京へ避難した小学生の姉弟だった。避難所で出会った支援者がこの給食活動に関わっていることを知り、助けられた自分たちだから、助けが必要な人々のために、母親と宮下公園に立っている。震災後、彼女たちは東京の小学校に転校した。ある時、談笑する級友に近づいたが、「放射能を浴びた子は長く生きられないんだって。だから、どの塾が良いかなんていう話は、あなたには関係ないよね」との容赦ない言葉を浴び、心身ともに傷んだ。

年が明け東京に大雪が降り大混乱になった日、彼女たちは母親に「私たちは何とかして塾に行くから、お母さんは公園へ行って。おじさんたちが寒い中で給食を待っているから」と、電話した。その夜、安倍晋三内閣総理大臣からは暖かい部屋で天ぷらを食べていたと、後日報道された。

この世界は不条理に満ちており、人間はその不条理に巻き込まれていく。福島原発核事故災害という不条理に巻き込まれた誰もが、子どもであっても大人であっても「私の人生、こんなはずではなかった」と呻いている。その呻きに出会い、痛みを分かち合いたいと願う人々も無数に生まれた。一方で、その不条理を知っても、自分には無関係だと視線をほかに移すこともできる。私も「なぜ、私がこの働きを担わねばならないのか?」と、何度となく祈り問うた。確かに、応えは与えられていない。しかし、原発核事故に人生を狂わせられた人々に出会っていることも、私の人生も変えられてしまったことも事実。となれば、出会った人々と共に、決して「福島原発核事故はなかったこと、仕方のなかったこと」にさせてはならないと声を上げ闘うこと、それが、神から私に託された働きだと覚悟を決めた。

小学生の姉弟が路上生活者に声をかけるその姿は、社会で最も小さくさ

れた存在と共に生きたイエスに重なる。どの生命も大切にされる「命どう宝」の社会は不可能ではないと、彼女たちは示したのか。では、キリスト者である私はどのように生きていくのか。この時代の希望とは何であるのか。鎮めるわけにはいかない怒りを抱えつつ、希望があると信じる方向へ今日も歩みを進めていく。

注

① 阿波根昌鴻（あはごん しょうこう 1901年3月3日 - 2002年3月21日）平和運動家。沖縄・本部町に生まれる。17歳でキリスト者となり、無教会主義の影響を受ける。戦後の沖縄で米軍強制土地接収に反対する反基地運動を主導した。